あぶらむ通信

第20号　1998年12月　　あぶらむの会発行

〒509-4121 岐阜県吉城郡国府町宇津江　TEL 0577-72-4219

作者　辻　利　彦

飛騨だより

冬の星座、3つ星のオリオンが大きく輝く季節となりました。皆様にはお元気でお過しのことと思います。1年半ぶりのあぶらむ通信、「オーゴーはまだ生きていたのか」という皆さんの声が聞こえてきそうです。長い長いご無沙汰、お赦し下さい。

昨年から今年にかけての1年間をあぶらむで生活を共にした者は過去最高の8名、私の至らなさと力不足で、この大家族を維持するだけで精一杯でした。「生活を共にする中から…」という理想とその現実の中での、それは激しい葛藤の日々でした。生まれや育ちがちがえば考え方や価値観もちがうのは当然ですが、他者との生活の中で自らの生き方や価値観を深く問い返すことなく、それらの違いが「綱引き」状態となり、各々の陣営に相手を引っぱり、引っぱられるという状況になれば、集団は最悪の様相をていしてきます。あぶらむの敷地は広いとはいえ、1日24時間顔を付き合せての生活は、1度回転の歯車が不自然になると、その修復に多大な労力を必要とします。8人家族(集団)を十分にまとめきれなかったところに、自分の至らなさと力不足をまざまざと見せつけられた1年間でした。

最近、私を捕える言葉の1つに、「打ち叩く」という言葉があります。新約聖書が書かれている古代ギリシャ語で、「教育」を「パイディア」といいます。今は亡き 林 竹二氏はこの言葉を「魂の世話」―やがて自分で自分の魂を世話して行く力―、そんな根源的な働き、人への関わりが教育であると語られたことに、私は深い共感と感動をおぼえました。この教育と訳される「パイディア」という言葉は、他に薫陶、躾け、懲戒、こらしめ、訓練という内容をもちあわせています。これらの意味内容をもった「パイディア」は、「打つ、叩く」という意味をもった「パイオー」という言葉に連動しています。児童虐待や学校等での体罰が問題となっている中で、このようなことを書けば穏やかではないのですが、私には「教育」(人が育つ)ということを考える時、この「パイオー」(打つ、叩く)という言葉がなぜか私を捕えて離さないのです。

先日BS放送で、武田鉄矢さんのご母堂イクさんを追悼していました。戦後の苦しい生活の中から5人の子供を育てられたその子育て実践論は多くの人々に気づきと感動を与え、逝去される直前まで乞われるままに全国を講演して歩かれたとのことでした。その講演テープの中で、「私はしかりつける時は真剣にしかりました。時には叩き、なぐりつけました。それはもう半端ではありませんでした。しかし、ほめる時も真剣にほめました。学校成績の悪い鉄矢がびっくりするような点をとってきた時、神棚にそなえました」という話が心に残りました。武田イクさんは叱る時もほめる時も真剣だったのですね。

私は、「教育」に連動する、この「打つ、叩く」といった意味内容をもつ「パイオー」という語を、「立ちはだかる」とか「立ちはだかり」といった言葉が適訳と思っています。

振りかえってみるに、自分の中にもし人間的成長というものがあるとすれば、それは数々の「立ちはだかり」にあったように思うのです。人の道をはずれたようなことを少しでもした時に打ち叩いた父、すさまじい兄弟喧嘩の時に「私を殺してからヤレ」と割

った母。言語を絶するような困難の中にも、人として凛として生き抜く姿を見せてくれた沖縄のハンセン病を病んだ人々。物質的極貧の中にあっても、いたわり合い、分ちあいながら強く生きるフィリピンやネパールで出会った人々。今、静かにふりかえって思うに、それらの人々の「パイオー」—立ちはだかり—は私の心を激しく打ち叩き、「一人の人間としてお前はどう生きようとしているのか、人生における自分の役割は何か」を激しく問うたのです。それは肉体的ビンタよりも打たれて痛いものであり、それ故にその「立ちはだかり」による痛みは自分を大きく育ててくれたと思っている。それは私の人生の「一里塚」であったと思うのです。

これまでこのあぶらむの里で数多くの若者と生活を共にしてきました。その中で私が今強く感じることは、彼らはこれまでの人生の中で、どのような「立ちはだかり」を、誰から、どのように与えられ、得てきたのだろうかという素朴な疑問です。「人前に立ちはだかることは、恨まれるか殺されるかどちらかだヨ」とある人がいった。一面の真理をついている。今の私にはライ園の人々のような柔和さに裏打ちされた立ちはだかりはできない。しかし、そのような円熟味を将来の課題としつつ、私は真剣さ故に立ちはだかることを役割としていきたいと思っている。

この夏は、あぶらむの里を体験学習の場として、いくつかの学校の課外活動の場として用いてもらいました。植林した木を育てるための下草刈りや田畑の辛い仕事に、若い汗を流していました。都会生活しかしらない彼らにとっては、これらの体験も1つの「パイオー」（立ちはだかり）だったと思います。おかげ様でこの不況の中にありながら、あぶらむは経済的にどうにかいざることができました。ありがたいことです。

私たちのこれからの課題は、この与えられた場をどのように用いていくかということです。私たちもいろいろな働きを考えていきます。そして皆さんもいろいろなアイディアをお寄せ下さい。そしてこの場を用いて下さい。それがあぶらむへの一番の支援です。よろしくお願い致します。

これからはあまりご無沙汰しないように努めます。どうぞ新しい年、皆様お一人お一人の上に豊かな平安がありますようお祈りいたします。

'98年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　博

山の下草刈りに汗を流す立教高校生たち。
あやまって幼木を切ってしまいました。
森林組合の人、ゴメンナサイ。でも多くの学びがありました。

’96年より続けてきた、「子供から大人までのネパールの旅」。私たちを優しく包み、心癒してくれるネパールの大地、そして人々。その出会いの中で、今日のこの物質的豊かさの中で、私たちが得たもの、そして失ったものをしっかりと見つめ直してみたいと、この旅を催してきました。
今年は病気で、半身の不自由な澤田さんが参加されました。標高1800mのガンドルン村までのトレッキング挑戦は、参加者に大きな感動と気づきを与えてくれました。「旅は気づきの場」であることを改めて実感させられました。

ネパール旅行に参加して

澤田一馬

１月末日でもって永年勤めていた銀行を定年退職し、これからの人生どの様に生きたらよいのか、次の仕事も決めずにしばらくの間考えてみたいと思っていました。それというのも11年前に大病を患い、左手首と右足首に障害が残り、銀行をはじめとして多くの人達の助けと、励ましがあって定年まで勤め上げることができました。その事に心から感謝していますし、身障者になった事で今まで見えなかった事が見えたり、ハンディーをもった人の気持ちが少しはわかってきたように思います。これからは少しでも世の中に恩返しができたらとの思い、自分を見つめなおす時として、また大郷先生はじめ参加した人達との交わり、ネパールの人達の出会いを大切にとの思いをもって参加させていただきました。カトマンズ空港につく手前でヒマラヤの山々を機上から眺めた時いいしれぬ感動を覚えると同時に、いっぺんに心の底から元気が沸き上がってきました。
今回の旅行で一番気がかりなのはトレッキングで、足の不自由な私がガンドルン村まで登れるのだろうか？皆さんに迷惑をかけてしまうのではとの思いは出発前からずーと待ち続けていました。しかし、カトマンズの市内観光から始まったこの旅行はゆったりとした日程で、のんびりとあるがままのネパールの人たちの暮らし振りを眺めてゆく時、心の不安が段々と薄れて楽しみと、「来てよかった。」との思いが強くなってきました。トリスリ川でのラフテング、チトワン自然公園での象乗りサファリ、若者と一緒になってのトランプ遊びなど楽しく日程をこなしてきました。同室させていただいた大郷先生との語らいは、これからの私の生き方に示唆を与えてくれた貴重な一時でした。

いよいよ最後のトレッキングを残すのみとなり、美しい湖のある町ポカラを後にしてスタート地チャンドラコットへと向かいました。ポカラからはヒマラヤの山々が白い雪をかぶって輝いていました。峠へと向かいまた谷底へと下がってゆくバスの車窓からは山の頂まで段々畑がつくってあり、水牛を使っての田おこしは、子供の頃良く見た牛を使ってやっていた風景とダブり懐かしくのどかなものでした。町の中の風景も人の動きも私たちがはるか昔に経験し、今失ってしまった人のぬくもりが伝わってくるものでした。チャンドラコットでの第一歩を踏み出したとき、左足は地面が少しでも傾いていると「くじく」ような状態になり小指に全体重がかかってしまい、予想していたとはいえ大変な道行きになると思いました。幸い特段の配慮をして下さり２人の案内人が両サイドを固め、後ろからは大郷先生が腰にまきつけたロープをもって転倒しないようにして歩き出しました。最初の休憩地までは比較的なだらかな上り坂だったため、「水戸黄門の一行のお通り」など大郷先生が冗談を言ったり休憩時に写真を撮ったりしました。しかし私としては通過する村人たちにけげんな顔でみつめられるので、「捕らわれたイエス様のゴルゴタへの道行きもこんな状態の苦しみの連続かな」と勝手に想像しながら左足

嶮しい山道を全員に支えられながら一歩一歩くだる沢田さん

の着地に全神経を集中して歩きました。次の休憩地で青竹を買ってもらい2本にして両腕にはさみ、4人で支えられながら登ってゆきました。この時から参加メンバーの大郷先生、丸山先生、笠井高志君、佐々木太郎君、神山拓史君、鵜飼祐一君らが交代で青竹をもってくださり、中村真紀さん、荒川恵理子さんらに励まされ一歩一歩自分の足であえぎながらすすみました。険しいゴツゴツした岩はとても自分の足で登り切ることができず、青竹にすがって行くしか仕方がありませんでした。こんなに皆さんの助けを借りて登る以上、どうしてもカンドルン村までたどり着こうと言う思いが苦しみの中から沸き上がってきました。やがて峠を越えて左に道が開けてきたところで、アンナプルナ南（7219m）とマチャプチャレ（6993m）の真白い山が眼前に飛び込んできました。雲ひとつない青空に悠然とそびえている姿は、私の苦しみを和らげ先へと進む勇気を与えてくれました。いつしか私に合わせて登るようになり、予定の5時間はすぎても目指すガンドルン村はまだ見えません。少し登っては休憩を繰り返し、「さあ一行きましょう。お願いします。」と休憩まで私のペースにあわせてくれました。それからどれだけの峠をこえたか覚えていませんが、やっとめざす山の頂にガンドルン村の一番高いところに立っている山小屋が見えてきました。ところがそこからの登りはきつく、見えているのになかなか近づかず休憩が多くなりました。他のグループが追い越していく中で手助けしてくださる外人の方もあらわれて、一団となって私を支えてくれるようになりました。どんなに苦しくても私自身の足を一歩づつ前にだけさなければ到着できません。やっとの思いでガンドルン村の入口にたどり着きました。先に山小屋に到着していた人達も最後の登りに手を貸してくださり、やっとの思いでたどりつきました。「ヤッター!!」と言う感激がこみ上げてきました。山小屋のガーデンにいた人々から一斉に拍手がおこり祝福してくれました。最年少の中村友一君から、「澤田さん使って下さい」と言って冷たいおしぼりを渡され顔を拭いている時、涙が次から次へとあふれてきました。ガンドルン村までのトレッキングは無理だと思っていた私を、参加者全員で押し上げて下さったことが嬉しくて、ビールで乾杯している時も、記念写真を撮っている時も涙は止まりませんでした。

アンナプルナ南とマチャプチャレは夕日に映えて黄金色にそまり一段と近くにそびえ、「よくきたね」と優しく声をかけてくれているように私をみつめていました…。

村での滞在2日間は雲一つない快晴が続き、朝夕変化して行く山々の輝きを堪能しました。下山は全員交代で私の手助けをしてくれました。右ひざをやられ登りよりもさらに困難と苦しみを味わいましたが、荒川恵理子さんが「自分も補助棒を担いたい。ゴールでの喜びを一緒に味わいたいから。」と言ってくださった言葉が、このトレッキングに参加して良かったと心から思いました。

私の苦しみを共に担って下さった人たち、喜びを共に喜んで下さった人たち…。この旅行での体験はこれからの歩みの中できっと私を変えてくれることでしょう。「困難に立ち向かう勇気、苦しみを喜びに、そして共に喜び合える。」そんなことを教えられた旅でした。

川をくだり

ジャングルを横切り

ヒマラヤの山々を目指す
ネパールの旅

'99 子供から大人までのネパールの旅、参加者募集
期間　'99年3月25日～4月6日　　お問合せ　あぶらむの会

グリーンツーリズムと「あぶらむの会」の役割

あぶらむ農業主任　加　藤　　正

グリーンツーリズム（以下ＧＴと略す）とは、「都市住民が農山漁村において自然・文化・人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」であるが、各地で自然発生的に始まっている。

本来グリーンとは緑という色に併せて「生きていくうえで心と体が休めることができ、リフレッシュできるものをグリーンの言葉にこめている」ということらしい。

「あぶらむの宿」も10年前に歩みだしたわけでまさに、人々の熱き渇きに応えたわけである。そしてこのことは今後も必要なことなのだろうか、ちょっと立ち止まって考えてみた。

ごめんなさい。変に理屈ぶるわけではないのだが、自分に言い聞かせる意味で小難しいことから書き始める。

わが国の産業経済を中心とする都市型生活は、隙間のない組織社会の疲労と長引く不況で、都市住民は精神的に疲れきっている状態が続いている。

中学生のナイフ事件や構造的汚職に代表されるような現象は、その一端であり、決して特異的な存在でなく、多くの人が潜在的に蓄積しているストレスではなかろうか。

また、そこまで極端に言わなくても都市社会の生活環境の劣化（住宅事情、交通渋滞、遠距離通勤など）によりＧＮＰが世界最高レベルといえ「豊かさの実感」のほど遠いことからくる心の不安がありはしないだろうか。

一方、わが国の農業・農村も有史以来の危機に直面している。それは他産業の著しい効率化、省力化された生産構造のものと比べ、天候に左右され、生命を育むことから生産される農業はどんどん産業間所得格差が拡大され、特に中山間地域のような条件不利地域では極端な高齢過疎化が進む耕作放棄地や集落の解体が急速な勢いで進みつつあり、産業としての農業はまさに崩壊寸前である。

要するに都市住民も農村も心がボロボロだということである。人々の目標も人生観も価値観も方向も何がなんだかわからなくなって「心さまよい」の現象が溢れ出している。

ブレーメンの音楽隊という童話がある。社会から捨てられたろばと犬と猫と鶏がブレーメンの音楽隊に入る途中どろぼうの住処をろば、犬、猫、鶏それぞれの得意技をもって団結し、どろぼうを追い出して自分達の住む場所（解放区）を作る。という話であるが、彼らは果敢に取り組み自分たちの心の休み場所として、そして再出発できる場所としての「宿」を確保した。

この童話の中で、ろば他４匹が旅の途中疲れはて、家の灯りを恋しく思う場面がある。灯りが恋しいというのは、５匹の心が豊かに育っている証拠であろうし、どろぼうを追い出す勇気は生きる気概をもっていることに他ならない。

現在の人々もブレーメンの５匹のように「灯りを恋しく」思い、「生きる気概」をまだ持っているとしたら、私たち「あぶらむの宿」は積極的に世に「宿」を提供しなければならないと考えられないか。

「あぶらむの宿」が人間回復のための「宿」であるとしたら、いろんなツーリストのためにいろんな交流場面とサービスを提供する必要がある。

ＧＴの交流場面は５つくらいだ。膝つきあわせる場面（農家民宿、研修合宿）、農地が仲立ちする場面（観光農園、体験農園）、商品が仲立ちする場面（ふれあい市、産直交流等）、伝承文化が仲立ちする場面（宇津江の祭りや郷土料理等）である。

この場面を「あぶらむの宿」が全て満たすのは不可能だ。「あぶらむの会」の活動主旨から場面を選択する必要があるだろうし、その場面を中心に機能を充実させることも一案だ。

人間回復のためには、人が人としてのサービスを受けることにある。それは規格化された大量消費、大量生産とは対照的なサービスであり、ＧＴサービスの原点である非効率、非競争のサービスである。また人以外のサービスとして、宇津江の山々の緑と空と谷川のせせらぎと田畑の作物の生きている力のサービスがある。

「宿」のサービスは家庭や集落という消費生活単位のもてなしの延長であるから手作りの温もりを持ち、ふるさとの雰囲気ふんぷんの土着的なサービスとなるし、仕事と遊びと教育、療法が輝然一体となった、人々の心身を癒すようなサービスであり、そしてふれあいの中で互いの存在を確かめ合う福祉的なサービスとなる。

「あぶらむの宿」の前の畑にはなしが移る。今年は大郷先生が畑の水をやりやすいように水中ポンプをつけて下さりイチゴの花盛りの頃、根気に水をやって下さった。

その気持ちは非常にありがたかったが、なにせ水圧の強いホースでの水やりである花粉が吹っ飛んだり花が壊れたりして、収量が少し少なかった。こちらの思いといちごの思いとに違いがある。またしてとも植物のはなしになるが、このえだまめの生長には、今、水をやったほうがいいのかやらないほうがいいのか、あいての気持ちに耳を傾ける。このことが「宿」としての最初のサービスになるのではないだろうか。

「あぶらむ」においでよ。あなたの探していたものがきっとあるから。

室田進著「心のキャッチ・ボール」より

20才トシが離れている長姉と末弟、下手したらトシ下の伯父になっていたかもしれない私です。4才違いの伯父と甥、しかし兄弟のように育ってきた私たち。

そんな彼が初エッセーを書きました。ユーモアの中にも、いろいろと考えさせられるところがあります。その一篇、皆様にもお届けいたします。

進少年

私が、小学生の頃の話です。

「進、あんたまたエンピツ失しなかしたがけ。いっつもいつも。この前、買ったばっかりじゃないがけぇ」

進少年は、ただだまって嵐のすぎ去るのを待っていました。

「こんなに失しなかしてばっかりおらんと、たまには拾ってこられんか」

と、母。

進少年は、とても勉強が苦手だったので、テストなどを見せる度に、いつも、

「はずかしや。はずかしや」

と、叱られてばかりだったのです。

拍子の悪いことに、親類の子供たちは皆、成績が良かったのです。進少年は、ただ褒めてもらいたかっただけなのに、学校の成績が、今二つなものなので、なかなか褒めてもらえなかったのです。

それからしばらくして、父兄参観がありました。母は、いっちょうらを着て、小学校に来たのでした。進少年は、母が来るのを知っていたので、今日こそは褒めてもらいたいと、気合いが入っていたのです。

進少年は、朝から教室中を捜し回り、ほかの教室にまで遠征して、ナント四本のエンピツを集めていたのです。

父兄参観の授業が、とても長く感じられました。進少年は終了のベルが鳴り終わるや否や母のところに飛んでいって、

「おかあさん。こんなに、見て。四本もヒロッタンダヨッ、僕」

と、会心の笑顔で言ったのでした。進少年の期待とは逆に、母は、目で合図を送るのです。しかし、進少年には、何の合図だかサッパリわからなかったのです。

私の懐かしい少年時代の話です。

人は、褒められると嬉しいのです。それは、大人も子供も同じなのです。特に、子供の心は純粋なので、何でもない言葉で喜び、そして、何でもない言葉で傷つくのです。私は、この何でもない「無意識の言葉」に、注目したいのです。

何でもないから、言った人も、意識がないのです。この意識がないのが、ヤッカイモノなんです。人を傷つけても、当人は気がついていないのです。私は、この「何でもない言葉」の中に、本音が含まれていると思うのです。

小さい時から、「お前は、やさしい子だよ」と、いつも言っていたら、その子は優しい子になるんです。「ダメだダメだ」と言われ続けたら、ダメになることが多いんです。健康に関しても、毎日「顔色が悪いなあ」と、言われ続けたら、人は病気になるものです。

何でもない言葉の中に、思いやりがあれば、どんなにか、人を救い、人を伸ばすことが出来るでしょう。

叱り上手、褒め上手になりたいものです。人は、褒められたら嬉しいのです。

地雷

何げなく、雑誌を見ていた時、不思議な写真に目が止まったのです。「書家・榊莫山」と、書いてあり、アトリエでの写真が大きく載っている。年齢は、七十歳くらいで、特

徴のある風貌。何百本あるかわからないほどの筆の中で、字を書いている写真なのです。文章を読んでみると、日本でも有数の書家らしい。

私が、注目したのは、肩書きでもなければね書いている姿でもない。アトリエの後ろの方に写っているヌード写真だったのです。日本的な書家のアトリエにヌード写真とはどう見ても似合わない。いや、似合わないどころではないのです。しかし、おかしなもので、私は直感的に、「この書家は本物だなあ」と、思ったのです。

いつとはなしに、榊莫山という書家に会ってみたいなあと思うようになったのです。そんな私の気持ちを察して、私の妻が、「いつか個展があったら、是非見せて頂きたい」と、本人にハガキを出していたのです。その返事が来たのは、七カ月も過ぎたある日のことでした。妻が私に、嬉しそうに、

「榊さんから直筆の招待状が届いたわよ」

と、言うではないですか。

その後、二人で大阪に向かったのは、言うまでもありません。

近鉄デパートの特設会場には、最終日というのに、真っ黒の人、人、人なのです。私は、内心ガッカリして、こんなに大勢の人では、満足に顔を見ることも出来ないなあと思ったのです。会場をひとまわりして作品がほとんど売れているのにビックリ。そして、まだ売れていない「南無阿弥陀仏」の書を見て、私は思わず「いいなぁ」とつぶやいたのです。丁度その時、「只今より、榊莫山先生のサイン会を行います」

というアナウンスがあり、あっという間に、七、八十人の人の列が出来たのです。

私は、並ぶのをあきらめ、サインするところを見ていようと、榊さんの近くにいたのです。ところが、私の淋しそうな気配を感じとった妻は、榊さんと私とを会わせたい一心で、いきなりサインをしている榊さんの所へ行き、

「主人が、あの『南無阿弥陀仏』が素晴らしいと言っているのですが――」

と、話しかけたのです。

榊さんは一瞬、驚いた風でしたが、

「何、あの書を気に入ったか」

と、言うなり席を立ったのです。そして、私たちを連れて行き、説明を始めるのです。

私は、まさか話が出来るとは、夢にも思っていなかったので、調子良く、

「南無阿弥陀仏というのは、おまかせします、という意味があるみたいですね」

と、言ってしまったのです。ところが、榊さんは、急に、

「あなたたち二人、こちらの部屋に来なさい」

と、言われ、大勢の人が待っているサイン会は、突然中止となってしまったのです。

それからの一時の話が面白かったことは、私にとって夢のような時間でした。

榊さんは、私に「人皆直行、我横行」という、先祖代々の家訓を教えてくれたのです。人と同じことはするなという意味なのです。そのスケールの大きさ、ユーモアあふれる語り口に、ただただうなるだけの私でした。

ある御婦人が、会場に自身で書かれた作品を持って来て、

「先生、批評して下さい」

と、言うのです。榊さんは一目見るなり、

「教えて貰った先生のザンガイが残っているなあ」

と、一言。

教えて貰った字ではなく、自分の字を書きなさいと言うことなのでしょう。

そうしているうちに妻が調子にのり、

「榊さん、私いつも主人に怒られてばかりなんです。どうしたらいいでしょう」

なんて、わけのわからないことを聞く始末。

私が、ハラハラしていると、

「それはねぇ、旦那さんの近くに埋めてある地雷を踏むからじゃ。そのうち、どこに埋

めてあるかわかるようになるから、心配しなくていいんじゃ」

私は、あまりに見事な説明に、なるほどなあ、そんな言い方もあるんだなあと思いながら、妻につられて、私も思わず、

「榊さん、ところであのヌード写真は良かったですね」

と、言ってしまったのです。

榊さんは、ニヤリと笑いながら

「NHKは、あれを写してくれんのじゃ」

と、言ったのでした。

地元「岐阜新聞」の「素描欄」に、拙文を寄せることになった。

自分を、あぶらむの会づくりにかり立てていったものは何だったのか、しばし自分のこれまでをふりかえるよき黙想の一時が与えられたようでした。ご笑読下さい。

あぶらむの会代表　大　郷　　博

私の仕事

私は10年ほど前まで、大学という場で学生の心にかかわる仕事をしていた。入試の時ともなれば、私にまで試験監督が回ってきた。

入試問題をみればチンプンカンプン、よくもこんな難しい問題が解けるものと、尊敬の念を覚えるほどだった。そんな難関を突破して入学してきた学生たちが、心のバランスを崩し、相談室に姿を見せる。自殺した者もいた。悩みに軽重をつけることはできないが、でもあえて「それしきのことで、なぜ！」と叫ぶ私がいた。

他方、学生たちとともによく訪れた沖縄の「ハンセン病（らい）療養所」や、フィリピン、ネパールの地に生きる人々の生きる姿。われわれの想像を絶する病や貧困のただ中にあっても、自分の人生において負わざるを得ない重荷をしっかりと負い、その重荷を人生の糧とでもしているかのように、凛とした生き方を私たちに見せてくれた。どの人もどの人も、「人生の良き旅人」であった。

物の豊かさの中にありながら、ささやかな人生の負荷の前に深く挫折し、心のバランスを崩してしまう日本の若者と、それと対照的な沖縄やアジアで出会った人々の姿。いつしか私の中に１つのコントラストが生まれていた。

「教育」という言葉はギリシャ語で「パイディア」という。それは「魂の世話」―やがて自分で自分の魂を世話していく力―と訳される。

人生は旅、私たちは旅人。予測不能な出来事としての人生に果敢に立ち向かう力（パイディア）を育てていくことが「教育」の基本と思い、私は教師のはしくれとして「人生の良き旅人づくり」を求めることとした。

そして今、この飛騨の山里で、ささやかな試みを開始した。

きのうのボクときょうのボク

「人生の良き旅人づくり」の仕事の１つに、私は「宿屋」をつくった。観光客相手の宿ではなく、旅人の宿屋である。旅人はさまざまであるが、その中で不登校の若者との長期生活もある。

ある時、「卒業させるから、その代わり学校に来ないでほしい」といわれた中学３年

生のS君とH君が来た。日本人なのに金髪で、少々元気よすぎる２人だった。学校の方も２人を持て余したようである。

この２人から、いろいろと考えさせられた。ちょうど稲の脱穀の時で、私は２人に稲架の片付けを命じた。手順を説明し、後は２人に任せた。最初は私の指示通りにやっていたが、そのうちに彼ら流のやり方であれこれと３度ほど新しい方法を試み、結局は私が指示したやり方に戻っていった。私はそんな２人を見て、とてもうれしかった。

夕食後の会話。「きょうはやり方を３度ほど変えたなあ」「見てたのか」「ああ、よく見てたよ」。このことがささやかな信頼感の出発点となった。その夜、彼らは大人や教師に対しての不満をぶつけた。

「先生はすぐ決め付けてしまう。それが腹立たしくて、つい粗暴になってしまう。きのうはやり過ぎたと反省し、きょうは少しは真面目にと思って学校へ行くのに、先生はぼくたちを見る目を変えようとしない。決め付けられてしまうと、その分だけかえって乱暴になってしまうんだ。きのうのボクと、きょうのボクは違うんだ！」

相手の中に日々生まれる小さな変化を追うことに疲れ、決め付けという１度押した烙印でしか人を見ようとしないならば、成長（変化）のただ中にある若者の心はすさんでも仕方ない。日々に生まれる小さな変化を受け止めてやることの大切さを、教えられた。

旅人の宿

尋ねられて返答に困ることの１つに、私の職業がある。あれこれ説明するのも大変なので、「宿屋の主人」ということにしている。「ああ、民宿ですか」と人は言う。そうですね、「旅人の宿」なんてキザですものね。

疲れた体を少し休め、新たな力を得て再び己が旅路に出て行く。大上段にふりかぶった大きな力ではなく、ささやかな、ちょっとした力でいい—そんな力、気付きを提供できる旅人の宿を私は願っている。

先年、イギリスを旅していて、ハッと思った。列車の車内販売はいずこも同じだった。しかし「富山名産鱒寿司はいかがですか。飛騨名物朴葉寿司はいかがですか」—こんな日本の売り子に対して、彼らのそれは「サム・リフレッシュメント」という言葉１つだった。

直訳すれば「元気回復」といったところ。それは１杯のコーヒーであり、ビスケットのかけらかもしれない。フルコースの食事でないことだけは確かである。しかし、そのささやかなものが旅の疲れを取り払ってくれ、新しい力を注いで、次の旅に押し出してくれるのである。

なぜかこの言葉は、私にとっても新鮮に聞こえた。私が目指している宿も、この「サム・リフレッシュメント」だと思った。

「旅人の宿」はまた、車のニュートラル・ゾーン（中立）でもあると思う。人生、ローがいいのかトップがいいのか。現在のポジションから次に移る時、ギアを必ず中立に入れる。そして新しい位置に向かうのである。このひと時たたずむ場所が大切なのである。

しかし、私たちは立ち止まることを恐れ、駆動していないと社会も評価しない。人生のニュートラル・ゾーンの認知は、社会の成熟度に比例する。

寄付者一覧（'97年8月2日～'98年11月10日）

加倉井佳子／具志堅興永／石神耕太郎／篠宮慶次／中村芳枝／高瀬章／愛楽園木曜会／奥田直樹／松井明子／本間勇吉／東晃・璋子／橋政興志／山崎俊樹／松村昭子／畑井正春／石原つや子／福田詩郎／河野正司／秦ユリ／小富誠司／青柳真智子／松田あけみ／武藤六治／稲垣昌子／佐倉淑子／弥永昌吉／工藤真喜子／池崎純一／浅野純子／岡登正子／深田淳夫・馨子／木村富昭／増山ふみ子／清水秀明／古市進／木村隆夫／森田トミ／久田広子／佃寿子／外村民彦／窪寺俊之／高島富美江／田尾兵二／島田信弥／溝際庸介／福留史郎／佐々木優・晶子／松島理恵／岩田牧夫／水野洋子／大城ツル／長田英子／紅林みつ子／柳川ハル／森本晴生／熊谷一網／金城由美子／白木晃／萩原康宏／室田正代／松本信代／大平途生／坂口玲子／円居久枝／飯田昭正／逸見操／畑野榮一／西依彩／高瀬留美／大野正雄・玲子／菊澤満喜子／又吉亀次／母と子を守る会・佐藤／石森牧・眞子／横浜聖クリストファー教会／豊里正子／八代洋子／形部賢／東京聖マリヤ教会／菊地栄三／多治見看護専門学校・福田トシ子／川合好子／坂本吉弘／上田敏明／西川伸八・栄子／磯貝澄美子／斎藤洋明・恵子／荒川紀子／馬橋奨／志賀直子／岡田斉／祈りの家教会／松丸一夫／松岡和夫／星野逸馬／尾崎嘉代子／横山博行／東京聖テモテ教会奉仕会／浦和諸聖徒教会／常見幸代／尾針恵子／嘉数弘子／島内定信／平野幸男／川上玲子／竹田純郎／前田康雄・彰子／岸井孝司／廣山正義・禎子／市川聖マリヤ教会／京都復活教会／葛飾茨十字教会／湯田啓一／掛川尚子／中部学院大・中部女子短大／長尾文雄／名古屋学院大学宗教部／松戸聖パウロ教会／藤島久馨・菊枝／岐阜バプテスト教会／蓑島幹雄／朝比奈誼／富山聖マリア教会／金子美祢子／安田英夫／牛丸忠男

新規会員（'98年11月10日現在）

浜本聡子／田澤聖子／竹中浩／谷山幸子／神山博之／大橋邦一／河野道太／菱川幸子／河合順子／安田英夫／伊藤幸雄・陽子／野田修助／日高光夫・和葉／吉越修・みや子／笠井正志／栗山盛雄・洋子／古林隼雄／田中隆治／米村路三／大井啓子／阿部章三／森井謙介／中山久子／竹内元章／長谷川秀司／向山信義／小池典昭／高橋惠太郎／大曲正剛／坂本和子／島内定信／佐柳尚男・暁子／澤田一馬／財部美代子／星野逸馬／三浦一雄／伊波興善／長田まどか

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安定の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。